

決定論的乱流理論構成への展望

防大

別所正和

概要

要は最新刊の「乱流現象の科学」の序論において乱流現象は本来ナビア・ストークス方程式の解であるという意味では決定論的現象であるけれども大変複雑であるから統計的方法に頼らざるを得ない、それ以外に方法はないと言っている。

この意見は大体において中正かつ標準的意見であると考えられるが、一方最近の計算機の大容量化と技術の進歩によりかなり複雑な流れのシミュレーションも可能になった。

この事は近い将来乱流現象をも決定論的に解く可能性に大きな望みを抱かせるに充分である。

そして同時に理論的側面から決定論的に解くとするならばどのような理論的構成が考えられるかまた流れをどのまで決定できるか(例えば「乱流の位相まで決定するのは殆ど絶望的に思われる)などについて考察を始める必要があると思われ、最近のカオス理論等はこの意味での一つの試みと考えられる。

本文は如上の観点からナビエ・ストークス方程式を解いて乱流解をうるための手順の試みを提示しようとするものである。

先ず“A, B, C 節”において非定常非圧縮性ナビエ・ストークス方程式のエネルギー一定理と変分原理について述べる。

変分原理の誘導にはナビエ・ストークス方程式の随伴形式の誘導が必要である。これまでに著者は線形理論からの類推で逆流形式を使って来たが、これは物理的には明確でかつ近似計算には有用であるが、さらに正確な解を求めようとするとき必然的に有限要素法に頼らざるを得ないので、その理論的基礎としての変分原理を導くために今回随伴流れなるものを導入した。この線形近似は今まで使ってきたオウレン・逆流水に一致する。
(2次元) 乱流
 少し節番号はとぶが次に 6, 7 節で時間平均流, 変動流についてその解法について考察し最後に 8 節で平面ポアゼ流についてもう少し具体的に解法について述べる。

参考文献

1. Oden, J. T., Reddy, J. N., "Variational Methods in Theoretical Mechanics" 2nd. ed., Springer, 1983
2. Olson, M. D., Variational Finite Elements Methods for Two-dimensional and Axisymmetric Navier-Stokes Equations, Chap. 3 of Finite Elements Methods in Fluids vol. 1, edited by Gallagher, Oden, Taylor, Zienkiewicz, John Wiley & Sons, 1975
3. Finlayson, B. A., Weighted Residual Methods and their Relation to Finite Elements Methods in Flow Problems, Do. vol. 2, chap. 1.
4. 斐友正編 乱流現象の科, 解明と制御
東京大学出版会, 1986
5. 別所正利, オセーニウシキに於て粘性流れの研究
オ1〜3巻, 日本造船学会論文集 昭和59〜61年
6. Orszag, S. A., Accurate solution of the Orr-Sommerfeld stability equation, J. Fluid Mech. (1971)
vol. 50, pt. 4, pp689-703.

A. 非定常運動のエネルギー一定理

運動方程式は

$$\rho \mathbf{u}_t + \nabla G - \mu \nabla^2 \mathbf{u} = \rho (1 + \mathbf{u}) \times \boldsymbol{\omega} \quad (A.1)$$

$$G = \rho + \frac{\rho}{2} \{ (1+u)^2 + v^2 + w^2 \} \quad (A.2)$$

$$\nabla \cdot \mathbf{u} = 0 \quad , \quad \boldsymbol{\omega} = \{ \omega_x, \omega_y, \omega_z \} \quad (A.3)$$

(A.1) の両辺に \mathbf{u} をかけ、領域 D 上に積分すると、

$$\int_D \left[\frac{\rho}{2} (\mathbf{u} \cdot \mathbf{u})_t + \mathbf{u} \cdot \nabla G - \mu \mathbf{u} \cdot \nabla^2 \mathbf{u} - \rho \mathbf{u} \cdot (1 + \mathbf{u}) \times \boldsymbol{\omega} \right] dx dy dz = 0$$

となり、

$$\frac{\rho}{2} \int_D (\mathbf{u} \cdot \mathbf{u})_t dx dy dz = \frac{\rho}{2} \frac{d}{dt} \int_D \mathbf{u} \cdot \mathbf{u} dx dy dz + \frac{\rho}{2} \int_S \mathbf{u} \cdot \boldsymbol{\nu} dS \quad (A.4)$$

なる関係がある。ここで、部分積分に於て、上の積分は

$$\frac{d}{dt} K + F - W = 0 \quad (A.5)$$

のようになる。

$$K = \frac{\rho}{2} \int_D \mathbf{u} \cdot \mathbf{u} dx dy dz \quad ; \quad \text{運動エネルギー} \quad (A.6)$$

$$F = \mu \int_D \boldsymbol{\omega} \cdot \boldsymbol{\omega} dx dy dz \quad ; \quad \text{粘性による散逸エネルギー} \quad (A.7)$$

$$W = - \int_S (\mathbf{u} \cdot \boldsymbol{\nu}) dS \quad , \quad \text{物体の存在仕事率} \quad (A.8)$$

$$\boldsymbol{\nu} = \{ X, Y, Z \} \quad (A.9)$$

$$(U \cdot \sigma) = -\rho (U \cdot \sigma) - \rho U (U \times \sigma), \quad (A.10)$$

(A.5) は「流れが一不減則」を示し、物体の単位時間当たりの仕事率は流体の運動エネルギー増加と粘性による散逸に等しい事を示している。

物体の加速運動を除き、実用上は殆ど場合の重要である。

i) 周期的運動

この場合一周期間積分すれば (A.5) の左辺の1項は

$$\int_{t_0}^{t_0+T} [F - W] dt = 0, \quad (A.11)$$

ii) プラップラ問題

一回転積分すれば (A.11) が成立つ。

iii) 乱流境界層 (物体静止)

充分長い時間平均 (Almost Periodic) すれば

やはり

$$\lim_{T \rightarrow \infty} \frac{1}{T} \int_{t_0}^{t_0+T} [F - W] dt = 0, \quad (A.11')$$

となる。

B. 非定常運動の変分原理と 隣接流小 (2次元)

運動方程式は

$$\left. \begin{aligned} u_t + \frac{1}{\rho} G_x + v \zeta_y &= \nu \zeta \\ u_t + \frac{1}{\rho} G_y + v \zeta_x &= - (1+u) \zeta \end{aligned} \right\} \dots (B.1)$$

$$G = p + \frac{\rho}{2} (1+u)^2 v^2 \zeta, \quad (B.2)$$

$$u_x + v_y = 0, \quad (B.3)$$

今後、導出するような隣接流小 (u^*, v^*) を導入し、連続の方程式を満たすものとして、(B.1)の2式にそれぞれ u^*, v^* をかけて、領域 D 上に積分すれば

$$\int_D \left[u^* u_t + v^* v_t + \frac{1}{\rho} (u^* G_x + v^* G_y) + \nu (u^* \zeta_y - v^* \zeta_x) - \nu \{ v u^* - (1+u) v^* \} \right] dx dy = 0,$$

また (A.4) の積分によつて

$$\begin{aligned} \int_D (u^* u_t + v^* v_t) dx dy &= \int_D (u u_t^* + v v_t^*) dx dy - \int_D (u u_t^* + v v_t^*) dx dy \\ &= \frac{d}{dt} K^* + \int_C (u u^* + v v^*) (u \cdot n) ds - \int_D (u u_t^* + v v_t^*) dx dy, \end{aligned} \quad (B.4)$$

2.12

$$K^* = \int_D (u u^* + v v^*) dx dy, \quad (B.5)$$

これを従つて更に部分積分すると

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} K^* &+ \int_D \left[-(u u_t^* + v v_t^*) + \nu \{ \zeta^* - G(u_x^* + v_y^*) \right. \\ &\quad \left. + \zeta \{ (1+u)v^* - v u^* \} \right] dx dy \\ &= - \int_C \left[\frac{G}{P} (u^* \cdot \mathbf{n}) - \nu \zeta (u^* \cdot \mathbf{s}) - (u \cdot \mathbf{n}) (u \cdot \mathbf{v}) \right] ds, \end{aligned} \quad (B.6)$$

今 随伴流れが次の方程式を満たすとしよう。

$$\begin{cases} -u_t^* + \frac{1}{P} G_x^* + \nu \zeta_y^* + \zeta v^* = 0 \\ -v_t^* + \frac{1}{P} G_y^* - \nu \zeta_x^* - \zeta u^* - \zeta^* = 0 \end{cases} \quad (B.7)$$

G^* を消去すると

$$\zeta_x^* + \zeta_x^* + u^* \zeta_x^* + \nu \zeta_y^* + \nu \nabla^2 \zeta^* = 0, \quad (B.8)$$

G^* は次の微分方程式の解となる。

$$\frac{1}{P} \nabla^2 G^* + (\zeta v^*)_x - (\zeta u^*)_y - \zeta_y^* = 0, \quad (B.9)$$

なお、元の流れについては (B.1) より

$$\zeta_t + (1+u)\zeta_x + \nu \zeta_y - \nu \nabla^2 \zeta = 0, \quad (B.10)$$

$$\frac{1}{P} \nabla^2 G + \{ (1+u)\zeta \}_y - (\nu \zeta)_x = 0, \quad (B.11)$$

(B.7) を (B.6) に代入して部分積分すると

$$\int_D (\zeta^* v + \zeta v^*) dx dy = \int_C [u(u^* \cdot \mathbf{n}) + \nu(u^* \cdot \mathbf{s})] ds, \quad (B.12)$$

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} K^* &= \int_C [u(u \cdot n) + v(u \cdot s) + \frac{G^*}{\rho}(u \cdot n) - \gamma^*(u \cdot s)] ds \\ &= - \int_C \left[\frac{1}{\rho} G^*(u \cdot n) - \gamma^*(u \cdot s) - (u \cdot u^*)(u \cdot n) \right] ds. \end{aligned} \quad (B.13)$$

を得る。

これが可逆定理であり、時向平均をとると前節で挙げたような場合には左辺が1項は0となる。

さて(B.8)で2次の項を省略すると

$$\zeta_t^* + \zeta_x^* + \nu \nabla^2 \zeta^* = 0 \quad (B.14)$$

となり(B.10)で同じく2次の項を省略した方が「=」流束の

$$\zeta_t + \zeta_x - \nu \nabla^2 \zeta = 0 \quad (B.15)$$

であるから随伴流れは元の流れの時向軸と一致流れ
 の方向を逆にした流れになり、従来考えて来た逆流れ
 「線形化解」
 には一致するが物理的像は不明確である。
 「非線形項のために」

また元の流れの式が与えらば(B.8)は準線型である。

(B.6) において

$$u^* = v^* = 0 \quad \text{on } C, \tag{B.16}$$

とき 時間 t で積分すること

$$\left[\mathbf{1}^* \right]_{t=0}^{t+\Delta t} + \int_0^{\Delta t} \int_D \left[-(u u_x^* + v v_x^*) + \nu \zeta \zeta^* + \zeta \{ (u+U)v_x^* - v u_x^* \} \right] dx dy dt = 0 \tag{B.17}$$

となるが、これは この問題を F.E.M. で解く際の 変分原理 となる。

つまり (B.16) を満たす 関数 u^*, v^* によって Galerkin 法 を使うための 原理式 となる。

この時 ^{最後} 前節であげた 場合には 左辺 沖ノ項 が なくなつて 簡単になる。

また 二般化の 問題を 解く 為の マトリクス において 随伴流れ の分は 元の 転置行列 になつてゐると 考へられる。

最後に (B.17) を解く 本質 (B.10) を解く事と 等価で、流れが 求まると (B.11) を 解り 2 G を求め、(B.2) に よつて 圧力を 求めて 解は 完成 する事になる。

この時 G の 境界条件 は (B.1) より

$$\frac{1}{\rho} G_n = \nu \zeta_s - (u_t x_n + v_t y_n) + \zeta \left\{ \nu x_n - \tau(u) y_n \right\} \quad \text{on } C \tag{B.18}$$

C. 續 (3次元)

運動方程式系 (A.1) ~ (A.3) を与えらる。

$$u_t + \frac{1}{\rho} \nabla \rho - \nu \nabla^2 u - (1+u) \times \omega = 0, \quad (A.1)$$

勾配をとると

$$\frac{1}{\rho} \nabla^2 \rho = \nabla \cdot (1+u) \times \omega, \quad (C.1)$$

回転をとると

$$\omega_t - \nabla \times \{ (1+u) \times \omega \} - \nu \nabla^2 \omega = 0, \quad (A.2)$$

$$\nabla \cdot \omega = \nabla \cdot u = 0 \text{ であるから}$$

$$\nabla \times \{ (1+u) \times \omega \} = \omega \cdot \nabla (1+u) - (1+u) \cdot \nabla \omega$$

とあるので結局

$$\omega_t + (1+u) \cdot \nabla \omega - \omega \cdot \nabla (1+u) - \nu \nabla^2 \omega = 0, \quad (C.2)$$

(A.1) に 随伴流れをかけた積分し 部分積分すると

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} K^* + \int_D \left[-u \cdot u_t^* + \nu \omega \cdot \omega^* - (1+u) \cdot (\omega \times u^*) \right] dx dy dz \\ + \int_S (u \cdot u^* (u \cdot n)) dS + \int_S (\tau \cdot u^*) dS = 0, \quad (C.3) \end{aligned}$$

$$K^* = \int_D u \cdot u^* dx dy dz, \quad (C.4)$$

結局 Adjoint Euler の方程式は

$$-u_t^* + \frac{1}{\rho} \nabla \rho^* - \nu \nabla^2 u^* + (1+u^*) \times \omega = 0, \quad (C.5)$$

と採れば"よかつう"。